

カタカナ英語と和製英語 - 最近の傾向を中心として -

須 部 宗 生

I はじめに

日本語には外来語が多く取り入れられている。その外来語のうち特に多いのは英語起源の外来語である。外来語および和製英語の研究者であるジェームズ・スタンローは日本語の「日常言語に占める英語の割合が10パーセントにもなる」¹⁾と述べている。また、『岩波国語辞典』第三版に収録されている外来語のうち約80パーセントが英語起源である。この英語起源の外来語は大きくカタカナ英語と和製英語に大別される。時にこの2つは混同してあたかも同義語のように使われている。しかしカタカナ英語と和製英語には違いがある。即ちカタカナ英語が例えば「コンピューター」などのように英語の発音を単にカタカナに置き換えただけでその英語の原義と同じ意味で使われているのに対し、和製英語は例えば「オーバードクター」などのように英語を使用しているが、英語としては理解不能であったり、英語の原義をかけ離れた意味で使われている、いわば日本語化された英語もどきの語彙であり英語の正用法としては認められていないものである。

本小論では、まずカタカナ英語・和製英語の先行研究と辞典、特に和製英語に関する最近の研究を概観したい。また前回筆者の論文(静岡産業大学論集『環境と経営』第19巻第1号)(2013年6月)でも論じたように、オンライン・ディクショナリーのメンテナンス実務の過程で筆者が新聞から集めた最近のカタカナ英語と和製英語の実例を挙げた後、特に和製英語の特徴を見届け、日本語において現在も増え続けるカタカナ語・和製英語の

背景や理由を考えたい。また外来語に関する諸外国の状況や立場と我が国の国語審議会の外来語一般に対するスタンスを確認した後、カタカナ英語・和製英語の問題とはいかなるものでそれらの将来の展望はどのようなものかについて考察したい。

II カタカナ英語・和製英語の先行研究・辞典等

言語学の中における外来語研究は比較的マイナーな分野だと考えられ、当分野では組織的な研究が行われてきたとは言い難いものの、その大きな流れを概観したい。加島によれば、「カタカナ英語及び和製英語を含む外来語研究の草分け的な存在として、荒川惣兵衛と榎垣実の二人」²⁾が挙げられる。前者は第二次世界大戦以前から外来語研究を始め、日本語になった英語の研究からスタートし、昭和16年に中型の外来語辞典を編集した後、現在の大型の『外来語辞典』第2版、角川書店、1977年の編集に至った業績で知られている。中でも当辞典の強みは用例や出典が充実していることである。また後者は『日本外来語の研究』、研究社、1963年の著作を著した後、1972年に『増補外来語辞典』、東京堂を出している。その後の研究書としては、吉沢典男の『外来語の語源』角川書店、1979年、また同氏の『図解外来語辞典』角川書店、1979年がある。また同年には『コンサイス外来語辞典』が三省堂から出ている。また、1981年には日東書院から『外来語辞典』が世に出た後、加島祥三の『英語の辞書の話』講談社、学術文庫本、1986年、続いて同氏の『研究社カタ

1) ジェームズ・スタンロー『和製英語と日本人』新泉社2010 p.237 l.12

2) 加島祥造『カタカナ英語の話』南雲堂1994 p.183 l.13

カナ英語辞典』、研究社、1987年が出版された。さらに同氏は『カタカナ英語の話』南雲堂、1993年を出している。³⁾

また最近では、特に学問的かつ組織的研究書とは呼べないものの、特に外国人著作による、和製英語の問題を扱った英語学習図書が多くみられる。例えば、スティーブン・ウォルシュ氏の『恥ずかしい和製英語』2005年、デイビッド・セイン氏の『その英語ネイティブは笑っています』2010年や『その英語ネイティブはハラハラします』2011年の類である。例えば、ウォルシュは和製英語の「ターミナルホテル」(英語では「末期のホテルなどの妙な意味に誤解される可能性が大きい」⁴⁾や「マンション」(英語では「大邸宅」の意味)⁵⁾などの例を挙げている。またセインは、特に和製英語が氾濫していると思われる野球に関する表現として、「ランニングホームラン」(英語ではinside-the-home run)⁶⁾を指摘している。確かにこれらの著は和製英語を英語の正用法と安易に思い込んで覚えてしまう日本人の英語学習者にとっては、意味のある学習書となりうるだろう。また実際にアメリカ本土で平均的なアメリカ人に対して行い、どの程度いわゆる和製英語が理解されるかに関して調査したアンケート調査である、石戸谷資による『和製英語アメリカを行く』1993年という異色で興味深い著書もあるし、赤川氏の『カタカナ語の話』1994年など、カタカナ語を日英文化比較という切り口で言葉の背後にあるものを興味深く探ろうとした著作もありそれぞれ存在意義があると思われる。しかしながらそのいずれもがカタカナ英語や和製英語を学問的かつ組織的な見地に立って論じたものとはまでは言えない。その点、より大きな観点から論じたカタカナ英語・和製英語に関する著作としては、松田氏の『日英語の交

流』1991年、加島氏の『カタカナ英語の話』1994年そしてジェームズ・スタンロー氏の『和製英語と日本人』2010年がある。特に注目すべきは、スタンロー氏は和製英語をいわゆる美しい日本語の汚染者としてはとらえてはいない点である。それどころか、和製英語は日英語の言語・文化接触のダイナミズムの結果生まれるもので、日本独特の文化の創造に寄与するものだとその立場に立っている。

Ⅲ 最近新聞から集めたカタカナ英語・和製英語

既述したように、筆者は長年オンライン・ディクショナリーの保守管理の実務を行っているが、その過程で新聞の中から過去に集めた、純然たる「和製英語」だと思われるもの、さらには和製英語のように見えて実は英語の正用法であるものを仮に「和製英語もどきのカタカナ英語」として以下に列挙する。また便宜上、和製英語が特に多い分野と思われるスポーツ関連のものとその他に分類する。さらに一般的に人口に膾炙した語彙を掲載すると判断される一般紙に載ったカタカナ英語・和製英語のおおよその傾向を見届けることが主たる目的である故、その英訳はここでは省略し、それらの羅列にとどめる。

1) スポーツ関係の和製英語

「デッドヒート」「ジャンピングスロー」「クロスボール」「バトンタッチ」「ネクストバッターズサークル」「キャッチボール」「フライングレシーブ」「セーフティバント」「チェアスキー」「スタンドイン」「バックスクリーン」「トライゲッター」「クロスプレー」「ヒーローインタビュー」「サインプレー」「ファンサービス」「サインボール」「シートノック」「トスバッティング」「ビート板」「キャンプイン」「ノーシード」「ストライクアウト」「コーチャーズボックス」「タッチアウト」「グランドゴルフ」

2) その他の和製英語

「マルチタレント」「水上バイク」「電子レンジ」「グラスポート」「ペーパードライバー」

3) 加島祥造『カタカナ英語の話』南雲堂1994 pp.183~187

4) スティーブン・ウォルシュ『恥ずかしい和製英語』草思社2005 pp.54~55

5) スティーブン・ウォルシュ『恥ずかしい和製英語』草思社2005 pp.160~161

6) デイビッド・セイン『その英語ネイティブは笑っています』青春出版社2010 p.16 1.18

「ボリュームゾーン」「モデルルーム」「タイトルロール」「マイナスイメージ」「ガスコンロ」「サイドリーダー」「セールスポイント」「チャレンジスクール」「サービス精神」「スケールメリット」「サインペン」「ランクイン」「バッティングする」「キャッシュバック」「マスコットキャラクター」「チャレンジ精神」「ノンステップバス」「電気ポット」「マイボトル」「メガソーラー」「メントレ」「メルヘンチック」「乙女チック」「ブックカバー」「エンディングノート」「オーバードクター」「リゾートマンション」「オープントスター」「ハンドルネーム」「サインボール」「メンチカツ」「コッペパン」「シャッターチャンス」「カーブミラー」「キャンピングカー」「マイブーム」「トレーラーハウス」「SA」「PA」「プラス思考」「マイナス思考」「ジェットコースター」「ペアルック」「マナーモード」「ブラインドタッチ」「ゴールド免許証」「ホームドラマ」「デノミネーション」「ホットカーペット」「インターチェンジ (IC)」「アピールポイント」「マナーアップ」「オンパレード」「プラスアルファ」「グレードアップ」「フリーダイヤル」「モーニングサービス」「ランチョンマット」「モンスターペアレント」「イメージダウン」「マスコットキャラクター」「ホームパーティー」「ツースhoot」「パラサイトシングル」「バージョンアップ」「ベビーカー」「テブカット」「食品ロス」「マンガチック」「アバウトな」「ドクターヘリ」「ストップ安」「コインパーキング」「ブルーシート」「サインペン」「ワンボックスカー」「レベルアップ」「ギャルママ」「エステティックサロン」「スタンドプレー」「カロリーオフ」「システムダウン」「ゼロゼロセブン」「ムードメーカー」「フロントガラス」「バックミラー」「グループサウンズ」「フリーター」「ゴールデンタイム」「ビジネスチャンス」「オートレース」「パイプ役」「プチトマト」「コピペ (コピーアンドペイストは英語)」「レジ袋」「アイスキャンディー」「ベビーラッシュ」「ピンチハンガー」「キャンピングカー」「イメージキャラクター」「メディアジャック」「オートキャンプ」「パワースポット」「トレパン」「レジャースポー

ツ」「マイペース」「バイキング (料理)」「ライトノベル」「フェミニスト (女性に優しい男)の意)」「ミキサー」「ゴーサイン」「ポーリング調査」「イートインコーナー」「リストアップ」「セット価格」「ワンポイントアドバイス」「企業マインド」「ウエス」「ビューラー」「クレーム」「オールバック」「ロールキャベツ」「キックスケーター」「ファミレス」「エンタメ」「ライトダウン」「アイドリングストップ」「フリーライター」「ゴ・サイン」「デリバリーヘルス」「ホームドア」「メイクドラマ」「ハリボタ」「イメージソング」「スタートライン」「ボンネットバス」

3) 和製英語もどきのカタカナ英語 (一見和製英語のように見えるが正しい英語)

「スポーツドクター」「ファミリーレストラン」「ワンタッチプレー」「スタンブラリー」「セットプレー」「マッチプレー」「ポジショニング」「ナンバープレート (英国語法)」「ハングリー精神」「ボイストレーニング」「ヘッドライト」「スイッチヒッター」「イメージトレーニング」「スーパースプレッター」「リスクコミュニケーション」「トレールランニング」「ベストミックス」「グローバルスタンダード」「ホットプレート」「オウンゴール」「スキミング」「モノクロ写真」「コンビニエンスストア」「ネイルアート」「フリーペーパー」「ワーキングプア」「ワンタイムパスワード」「アイデアマン」「セールストーク」「ダイビングスポット」「スルーパス」「パワーゲーム」「ゲーマー」「マッサージチェア」「ドクターフィッシュ」「ノーヒットノーラン」「グループディスカッション」「ワンストップサービス」「スポーツドリンク」「ベビーバス」「ホームアンドアウェー方式」「シーソーゲーム」「オピニオンリーダー」「トークショー」「チャイルドシート」「トーンダウン」「ロービジョンケア」「クラフトビール」「テーブルマナー」「ボタンドアウンシャツ」「ターンオーバー」「ペーパータオル」「スリーピース」「ファストファッション」「ウイニングボール」「スケールアップ」「キャッチフレーズ」「ポイントカード」「サバイバルナイフ」「ファンヒーター」

「プロテスト」「リアルタイム」「パワーウィンドー」「ミックスベジタブル」「センターライン」「ノーwindアップ」「クイックモーション」「セットポジション」「コンパクトシティー」「コールセンター」「チャイルドシート」「スピードアップ」「クーリングオフ」「ニューフェイス」「プレイルーム」「ガイドマップ」

- ・チャレンジ精神 (チャレンジ + 精神) (willingness to take on challenges)
- ・レジ袋 (レジスター + 袋) (checkout bag)
- ・セット価格 (セット + 価格) (bundle(d) price)
- ・ストップ安 (ストップ + 安い) (maximum loss allowed by the Stock Exchange)
- ・アバウトな (アバウト + な) (irresponsible, unreliable)

IV 和製英語の特徴

IV - 1 形態から見た特徴

一見無秩序に生まれる和製英語のようではあるがその形態はいくつかに分類できる。前章で筆者が集めた用例も交えて加島の提示する方法で以下に分類してみる。

1) クロスオーバー語

これは特に2つの言語を起源とする語彙が混成して成立したと考えられる和製英語である。例えば「ジャリトラ」などが考えられる。即ち「砂利」の部分は日本語で「トラ」の部分は英語の「トラック」を示している。また「カラオケ」などがある。しかしこのクロスオーバー語の中には「企業マインド」や「食品ロス」などのようにまだ全体をカタカナで表記するのではなく、一部を日本語表記にして示すものも少なくない。これらは今後全体がカタカナ表記に移行していく過程にあるとも考えられる。なぜなら「乙女チック」などは日本語表記と英語起源の部分のカタカナ表記が混じっているものの、同じメカニズムで成立したと判断される「マンガチック」は全体がカタカナ表記になっているからである。さらにクロスオーバー語のなかには「バンドする」など英語に日本語の動詞「する」を加えて使う場合も少なくない。また「エレガントな」ならまだしも「オーバーな」など和製英語の形容詞用法例も散見される。いずれにしても以下クロスオーバー語の実例である。英訳と共に列挙する。

- ・ガスコンロ (ガス + 焔炉) (gas stove)
- ・アテレコ (当て + レコーディング) (dubbing)
- ・満タン (満 + タンク) (filling up the tank)

2) 尻切れ語

これは語彙全体のうち後ろの部分を持ち捨てて表記するタイプの和製英語のことである。例えば、「デパート」「アパート」は英語では各々、department store, apartment house となるはずである。この尻切れ語の類の省略語はカタカナ英語を和製化する場合だけにみられる特徴かと言うとそうでもない。なぜなら純然たる日本語であるはずの「携帯電話」も日常的には「携帯」と頻繁に略している場合が多いからである。またこのグループの中にはご丁寧に尻切れ語が二重に使われている場合も見られる。例えば、筆者が集めた実例の中で言えば「ファミレス」である。これは英語のfamily とrestaurantの2つの各々の語彙の後ろの部分を持ち捨てた形を成している。また最近の和製英語のうち尻切れ語としては今回の筆者のデータの中でも「メガソーラー」があった。それは英語としてはmega solar power plantと言うべきである。さらに最近の傾向として例えば「サービスエリア」「パーキングエリア」「インターチェンジ」と言うべきところを「SA」「PA」「IC」と表記している日本独自の表記法が見られるが、これも敷衍して考えれば一種の和製英語の一種であると考えられる。以下その他の実例を、その元となったと考えられる英単語と共に列挙する。

- ・イラスト (illustration)
- ・ビル (building)
- ・メントレ (mental training)
- ・コピペ (copy and paste)
- ・トレパン (training pants)

- ・エンタメ (entertainment)
- ・ハリポタ (Harry Potter)
- ・パソコン (personal computer)

尤もここで挙げた「トレパン」に相当すると思われる英語のtraining pantsは日本語とは別意の、「幼児の用便練習用パンツ」という意味で使用されている。

3) 首なし語

これは2)の尻切れ語とは反対に語彙全体の前の部分を切り取ってしまう和製英語である。例えば英語ではsewing machineと言うべきところを和製英語では、machineの部分だけを「ミシン」というような場合である。しかしこの事例は尻切れ語と比べ格段に少数だと思われるし、筆者が今回の小論のために集めた用例の中にもこの首なし語と思われる用例は「フリーター」(語源は英語+ドイツ語のfree-lance Arbeiterで、「ター」の部分首なし語と考えられるが、「フリー」の部分は尻切れ語と思われる。)と「ホームドア」(語源は英語のplatform doorで「ホーム」の部分首なし語と判断される)の2つだけであった。以下その他の事例である。

- ・ニス (varnish)
- ・ネル (flannel)

4) 順序入れ替え語

これは多くの外来語研究者が認めた分類ではなく、筆者が特に独自で考え出したものであるが、日英で語の順序が入れ替わったものである。このような類は数少ないと思われるが今回のデータの中から、和製英語と正当な英語とは単語の順序が逆になっていると思われる用例が2つだけ見つかった。即ち1つめは「ロールキャベツ」である。『新英和大辞典第5版』によればこれはcabbage rollとなっている。また2つ目は「オーブントースター」で英語ではtoaster ovenである。

IV 2 意味内容・成立過程から見た特徴

ではさらに以上のような形態の特徴からではなく筆者が新聞から集めた和製英語のサンプルを意味内容やその成立過程の観点から以下のいくつかに分けてみる。

1) 部分的には正しい英語とみられる和製英語

以下の和製英語はそのまま英語発音で言えば英米人でも理解できるのではないかと推測されるものである。なぜなら例えば「セールスポイント」は正しい英語では、selling pointだったり、「マスコットキャラクター」は単にmascotだったりその一部が英語としても成り立つものだからである。またこのことを裏付けるように、石戸谷が米国で行ったアンケート調査の中の例えば、和製英語である「サラリーマン」の意味は案外、現地の人たちに理解された⁷⁾との報告もある。以下その他の事例である。

- ・キャッチボール (playing catch)
- ・ジャンピングスロー (jump throw)
- ・グラスボート (glass-bottom boat)
- ・スケールメリット (the merit of scale)
- ・システムダウン (system failure)
- ・ビジネスチャンス (business opportunity)
- ・イートインコーナー (eat-in section)

2) 日本生まれのものやその概念を表した和製英語

次は日本人が日本で生まれたもの及びその概念を英語を駆使し表現したタイプの和製英語と考えられるものである。因みにKODでは「チャレンジスクール」を以下のように英語に訳している。

チャレンジスクール [不登校経験者・高校中退者を受け入れる定時制・単位制の都立高校] a "challenge school"; a part-time, credit-system Tokyo Metropolitan high school that specifically accepts dropouts and students with a history of nonattendance.

また山口によると、「キックボクシング」も日本生まれの和製英語であるとのことだ。⁸⁾

以下その他の事例である。

- ・ゴールド免許証 (gold license; (説明的に

7) 石戸谷滋 『和製英語アメリカに行く』大修館 1993 p.55

8) 山口理 『外来語・和製英語』偕成社2012 p.106

は) driver's license [《英》 driving licence], valid for three years for those over seventy years of age and for five years for those under seventy, issued to drivers with no violations in the previous three or five years)

・グランドゴルフ [ゴルフに似た日本起源の球技] (ground golf)

3) 日英で異なる意味の和製英語

以下は日本語と英語では意味が微妙に大きく異なる和製英語である。例えば、「デッドヒート」は英語では日本語のように「激しい競り合い」を意味するものではなく、「同直で勝ち負けが成立しない試合またはレース」の意味である。また「ベビーカー」は日本語のような「赤ん坊を寝かせて運ぶもの」の意味は英語にはなく「小型自動車」の意味である。以下その他の事例である。

・ブックカバー (book wrapper, (dust) jacket) (英語で言えば「表紙」の意味)

・マイブーム ((temporary) personal obsession) (英語で言えば「私のにわか景気」の意。

・デノミネーション [100円を1円にするような通貨の呼称単位の切り下げ] ((currency) redenomination [revaluation]; dropping [trimming, lopping] 《two》 zeroes 《from the yen》; [通貨の呼称単位の変更] renaming a monetary unit; (a) redesignation [change] of the name of a monetary unit (英語で言えば単に「貨幣の単位」の意味で、日英で別ものを指す)

・ベビーカー (baby carriage; pram) (英語で言えば「小型の車」)

・ミキサー (blender) (英語で言えば「大型工業用ミキサー」)

・フェミニスト [女性崇拜者] (admirer [adorer] of women; ladies' [lady's] man; [女に甘い男] man who is unusually kind [obliging] to women; chivalrous [gallant] man (英語で言えば「女権拡張論者」)

・バイキング smorgasbord; all-you-can-

eat buffet (英語では8~11世紀に活躍した北欧人)

・クレーム complaint; objection (英語では「請求・要求・主張」)

・カンニング cheating (in an examination); cribbing (英語で言えば「狡猾な」)

4) その他、日本独自の創造的和製英語

和製英語の中には時にわれわれ日本人も感心するほど上手くできたと思われるものも少なくない。この分類は前の2)とやや重複すると思われるが、特にここではジェームズ・スタンロー氏の言う和製英語のダイナミズムの表れとでも呼ぶべき、日本人の創造した独特の和製英語と考えられるものを挙げてみたい。また因みに日本人全体による創造的和製英語とは言い難いが、往年のジャイアンツの三番打者で現ジャイアンツ名誉監督である、長嶋茂雄氏が作ったとされる、「メークドラマ」は異色の存在であり、その後も多くの日本人に愛され使われ続けている。以下筆者の集めたデータから一部の実例を2013年6月に既に扱った「シェアハウス」など⁹⁾を除いてKODの英語訳と共に列挙する。

・ネクストバッターズサークル (the on-deck circle)

・ヒーローインタビュー (interview with the star of today's game)

・サイドリーダー (supplementary reader)

・エンディングノート (notebook explaining how one wants one's body, property, etc. to be disposed of after one's death)

・オーバードクター (person who has finished a doctoral course and is still looking for a job)

・ボリュームゾーン ([全体の中で最も多数が属する価格帯・年齢層・商品群など] (the main 《price range》; the largest 《age group》; the bulk 《of merchandise》)

・マナー・モード (the silent mode; the silent ring [silent-ring] mode)

・バッティングする (clash [collide, con-

⁹⁾ 須部宗生 静岡産業大学論集「環境と経営」第19巻第1号2013年6月p.64 r. 1.7

- tend] 《with...》)
- ・ジェットコースター (roller coaster)
 - ・シャッターチャンス (the right timing [a good opportunity] for taking a good photograph; the best [right] moment to take a good picture)
 - ・ブラインドタッチ (touch-typing)
 - ・ホームドラマ ((TV) drama depicting family [home] life)
 - ・モンスターペアレント (parent who makes selfish and unreasonable demands on behalf of his child)
 - ・パラサイトシングル (unmarried person who, unable to stand on his own, lives with and is supported by his parents)
 - ・ドクターヘリ (medical helicopter with a doctor aboard)
 - ・ベビーラッシュ (spate [flood, rush] of births)
 - ・パワースポット (place with mysterious mystical powers; place which imparts (supernatural) spiritual energy)
 - ・アイドリングストップ (stopping [switching off] the engine when a vehicle is not moving)
 - ・ゴールデンウィーク (the period between late April and early May when a series of national holidays fall in close succession)
 - ・カルチャースクール (open school for adult education; school offering adult education classes)

V カタカナ英語・和製英語が日本語に多い背景

V 1 歴史的・社会的状況及び国民性の基づくもの

現在もカタカナ英語や和製英語は加速度的に増え続けているといっても過言ではない。これは松田も指摘しているように、『アメリカの国民的辞典である『ウエブスター第3版(1961)』の総見出し語数45万のうち英語として認められた日本語起源の語彙の数は328個に過ぎず、英語に対する日本語の貢献は僅少

で皮相的に過ぎない」¹⁰⁾

しかし、そもそも日本の歴史をひも解いてみれば、西欧からの外来語よりもずっと先に中国から漢字そのもののみならず、大量の漢語という外来語を導入し、それを日本語化していたという事実がある。このことで日本人には外来語の導入とそれを日本語化するという事に慣れ親しむという国民性が形成されていったと考えられる。やがてこれが下地となり、特に明治維新後、英米から多くのことを学ぶこととなった日本が多くのカタカナ英語や和製英語を日本語に導入するという流れにつながったのではないだろうか。その後日本は第二次世界大戦で英米をはじめとする連合軍に敗北するが、この敗戦が結果的にカタカナ英語・和製英語の増加に拍車をかけたと考えられる。この敗戦で日本人の心に中に英米に対する劣等意識、さらには羨望、憧れという気持ちが強く植えつけられたはずである。また戦後日本はアメリカの指導の下に、英米中心の教育を始めた影響もあるだろう。またさらに戦後日本が行った漢字制限も影響したのではないだろうか。それまで英語起源の外来語を漢語に置き換えるという努力はあった。例えばadult educationを「成人教育」、chain reactionを「連鎖反応」などと意識したケースである。しかしこのような例は少数派にとどまり、多くの英語由来の外来語はそのままカタカナ表記にされるか、和製英語化されるという道をたどったと考えられる。しかし積極的にその道を選択したと言うよりも、加速度的に増える英語由来の外来語を漢字に意識するには労力も時間も不足していたというのが実情はなかったかと推測される。

V 2 日本語の言語性に基づくもの

以上みたように、日本語にカタカナ英語や和製英語が多用されるようになった背景として歴史的・社会的状況およびその中で培われていった日本人の国民性があったことは否定できない。しかしそれだけで日本語に外来語そのものが多い事実を説明はできないし、前

¹⁰⁾ 松田裕 『日英語の交流』研究社出版1991 p.237
11.1-6

述以外の要素もあったと思われる。例えば日本語そのものの言語の特徴が外来語を摂取するのに本来的に向いていたのではないかということである。『新英語学辞典』によれば接辞を多く使う日本語は膠着語に分類されている¹¹⁾が、「～は」「～に」「～を」などの助詞の使用によって、語順に制約されることないという膠着語としての日本語の特性そのものが外来語を自由に導入する上で有利に働いた、と考えられる。

VI 外来語の諸外国事情

日本だけでなくおよそ世界のどの国でも当然のことながら、外国との交流があり、その結果外来語が多く使われている。ではここで外国の言語においては、外来語はどの程度使われているのか、また外国語に対する彼らの国策たるものはどんなものか、イギリス、フランス、ドイツのケースを概観したい。まずイギリス人は基本的に外来語の使用に関しては寛容でありやや成り行き任せの態度をとってきたようである。しかしながら、これは彼らがそうせざるを得なかった、とするのが実情だと考えられる。即ち、この態度の背景の奥深くには、11世紀の「ノルマン人による征服」があると推測される。即ち現在のフランスによるイギリスの屈辱的な征服とみられるイギリス史上の大事件である。これにより、イギリス人の元来のアングロサクソン語とフランス語が混在する結果になった。この英国言語の基本的二重構造は、中国の漢語と大和言葉が混在する日本語の構造と偶然にも酷似している。その結果、日英両語がやや雑然としたものとなったことは否定できないものの、加島も述べているように、日英語の基盤となった「両系統の言語の混在や融合の結果が有利に働き、実に柔軟自在な言語になった」¹²⁾はずであり、これが、筆者も痛感している日英両語に共通するダイナミズムではないかと考えられる。そしてそれを裏付けるように日英

でも共通して外来語を自国言語化する傾向が強い。即ち、イギリスでも特に外来語をそのまま使用することは極力避け、発音、綴り字の両面において英語化する傾向が強い。またこの傾向は日本においても、今なお増え続ける和製英語に如実に表れていると思われる。

ではドイツの場合はどうであろうか。ドイツ人はイギリス人とは異なり、外来語を強く意識して自国語と区別する傾向が強かったと思われる。それはどこの国にも普通にあるような、外来語も掲載されている「国語辞典」的な存在がないことに如実に示されているようである。当然ドイツ語にも多くの外来語、特に英語由来の外来語が多用されているし、外来語を調べる必要がドイツ人にもある。しかしそのような場合にはドイツ人は普通の国語辞典である「ドイツ語辞典」は使用せず、特に外来語だけを扱った「外来語辞典」を別途使用するそうである。このようにドイツ人は「国語辞典」と「外来語辞典」を使い分けている。

さらにフランスの場合であるが、フランス人は過去のラテン文化の栄光に対するプライドが強かったためか、外国語に対しては排他的な態度をとってきたようだ。特にフランスは国策として「アカデミーフランセーズ(フランス学士院)」による外来語、特に英語由来の外来語の規制に努力してきた。しかしその結果、加島の指摘通り、「言葉の表現力の衰退化につながった」¹³⁾ことは否定できないという大きなマイナス効果をもたらしたと考えられる。

VII 外来語に対する国語審議会の立場

では日本における外来語に関するスタンスはどんなものであろうか。国語審議会の「第二期国語審議会 新しい時代に応じた国語施策について」と題する審議経過報告の「国際社会への対応に関すること」の項目の四、その他の(一)外来語の増加や日本語の中での外来語の過度の使用の問題を取り上げている。即ち具体的には平成7年の文化庁の世論

11) 『新英語学辞典』研究社1995 p.1276r. ll.20~21

12) 加島祥造『カタカナ英語の話』南雲堂1994 p.211 l.5

13) 加島祥造『カタカナ英語の話』南雲堂1994 p.216 ll.5~6

調査では、今以上に外来語や外国語が増えることについて、「多少増えてもよい」が44.8%と最も高く、以下、「今以上には増えないほうがよい」が30.4%、「いくら増えてもよい」が18.1%、「減るほうがよい」が6.6%、「分らない」が5%となっていて、外来語の増加に対しては、それほど抵抗を感じていない人が多く、特に若い世代には増加容認の割合が高いという結果を発表している。しかしながら次のような観点から日本語の中での外来語・外国語の過度の使用については何らかの歯止めが必要であるとする声も上がっているとしている。即ち、

1. 同じような言葉が日本語にあるにもかかわらず外来語・外国語を使うのは日本語の軽視につながり日本語の伝統を崩すことになる。
2. 外来語・外国語を使う傾向は特に若い世代に強く、こうした語の多用が世代間のコミュニケーションにとって障害になる可能性がある。
3. 言語の意味から外れた誤った外来語使用やいわゆる和製英語の濫用は避けるべきである。日本語を乱すだけではなく、日本人の外国語学習にとっても障害となるなど、の三点を挙げている。さらに、まとめとして外来語・外国語の使用について次のアドバイスを述べている。そのアドバイスを2つにまとめると以下の趣旨となる。即ち、
国際化や新技術の開発などにより、日本語の訳語より外来語・外国語がわかりやすい場合には、必要に応じて、使用することはいい。しかしそれらの安易な使用は極力避けること
外来語・外国語を使う場合は相手に配慮し、できる限り注釈等をつけること、である。

VIII カタカナ英語・和製英語の問題と将来的課題

以上和製英語を中心に外来語とカタカナ英語を考えてきたが、これを踏まえてここではカタカナ英語や和製英語が日本では、どのような問題をもたらすと考えられているか、

さらにそれを将来、どのような態度で対処していくべきかに関して考えたい。

既述したように、日本人の英語学習及び日本における外国人留学生の日本語学習における和製英語の問題は存在する。なぜなら和製英語を英語としてすっかり鵜呑みにして使用してしまうリスクは常にあるし、一旦学習した英語を利用して日本語学習の効果を上げたいと考える外国人留学生にとって、英語と異なる和製英語の意味を覚えなおすのはかなりの労力を要するからである。特に最近の和製英語は実に巧妙にできていて、即座に和製英語と判別できないものまで出てきている。例えば「存在さえも確認されていない奇妙な動物」を意味する「ユーマ」(日本人が考え出した、an unidentified mysterious animal という英語からできた和製英語で実際の英語はcryptid) などであり思わず英語として使用してしまいそうである。また英語の正用法ではない和製英語と英語の正用法をただカタカナ表記に著しただけの「カタカナ語」の見分け方は思ったほど容易ではない。例えば、「レベルアップ」は和製英語であるのに対し、それによく似た「スケールアップ」は単なるカタカナ語で英語の正用法としても成立する。また「スピードアップ」も英語の正用法である。しかしその逆の意味で使用される、「スピードダウン」は和製英語で、英語ではslow downと表現されなければならない。さらに最近のカタカナ英語の中には一見すると和製英語ではないかと疑いたくなるが実は「ワンストップサービス」などのように歴とした英語である場合も少なくない。またさらに複雑なことには、「開店」を意味する「オープン」は多用されるカタカナ英語ではあるが、問題はその反対の概念を意味する「閉店」の「クローズ」はあまり使われない。このように、カタカナ英語の使用一つを見てみてもかなりのアンバランスとばらつきが見られる。

ではこのような問題に対する対処方法であるが、このような場合は日本語の優先的使用が望ましいのではないだろうかと考えられる。即ち、「レセプト」や「インフォームド・コ

ンセント」などの安易なカタカナ語の使用は避け、各々「診療報酬明細書」や「治療説明と同意」などとする事で、国語審議会の提言通り、明示的な日本語試使用を優先すべきだと思われる。しかしながら、「レストラン」「旅館」、「ごはん」「ライス」などは両方多用されるのだが、日英両語で、ニュアンスが異なり、意味の分化が起き、使用される状況が異なると考えられる場合も少なくない。また、「パラシュート」「落下傘」では、後者はほとんど使用されず、ほぼ廃語化もしくは死語化していると考えられる。さらに、「シーズン」「季節」では意味の分化が起きているとほどではないものの、ニュアンスがやや異なると考えられる。このような場合には、カタカナ英語と本来の日本語の使用を使い分けていくしか方法はないだろう。また、カタカナ英語が優勢に成りつつある中で、少数ではあるが元来の日本語がその地位を守り続けているものもある。たとえば、「レプリケーター」や「フリッジ」とは言わず「冷蔵庫」が今なお使われているし、「洗濯機」の代わりに「ウォッシャー」はあまり使われない。このような場合には、強いてカタカナ英語を使うと別のものを思い浮かべるなど意味の取り違いも起こる可能性さえある。またこのような技術面の分野ではなくても「ひまわり」はカタカナで「ヒマワリ」と表記されることはあっても、フェリーボートの名前として使われている「サンフラワー」というカタカナ英語で言われることは少ない。このように、元来の「日本語」と「カタカナ英語」の使用における相関関係の現状は複雑である。いずれにせよ言語は簡単に規制しようとしてもできるものではないと思われるが、行き過ぎた傾向やばらつきに対しては、国語審議会が合理的な指導を打ち出すなどの動きが期待される。

IX おわりに

以上みてきたように、特に和製英語の関しては、否定的な考えも強いようである。しかし既述したように、カタカナ英語や和製英語は日本語を取り巻く、長い間に培われてきた歴史的かつ社会的状況や日本人の国民性のみ

ならず日本語そのものの言語の持つ特徴に起因するものと言える。さらに純然たる日本語でさえもカタカナで表記することが普通になっているものも多くある。例えば動物、植物の名前、食品名などは然りである。例えば「豚」ではなく「ブタ」、「鳥」ではなく「カラス」、「茄子」ではなく「ナス」、「南瓜」ではなく「カボチャ」、「米」でなく「コメ」などである。このように日本語自体の中に漢字ではなくカタカナ表記にする大きな流れがあることは否定できない。従って、いかにカタカナ英語や和製英語を規制しようとしても言語というものの本来性からして不可能であると考えられ、カタカナ語や和製英語が日本語に増え続けるのは日本語の宿命とも思われる。また世界のグローバル化、雇用のボーダーレス化、英語の国際言語化などの中で、外来語、カタカナ英語、和製英語を規制しようという動きが単にナショナリズム的なものに基づくならば説得力に欠けるものと考えざるを得ない。だとすれば、多少面倒ではあってもそれらを系統的に研究し、英語学習に生かしていくのが得策ではなかろうか。それ故筆者も今回の小論を皮切りに今後もカタカナ英語・和製英語を積極的に研究し学生の英語学習指導における一つの切り口としていきたいと痛感する次第である。

参考文献等

- ジェームズ・スタンロー『和製英語と日本人』新泉社2010
 加島祥造『カタカナ英語の話』南雲堂1994
 スティーブン・ウォルシュ『恥ずかしい和製英語』草思社2005
 デイビッド・セイン『その英語ネイティブは笑っています』青春出版社2010
 石戸谷滋『和製英語アメリカに行く』大修館1993
 山口理『外来語・和製英語』偕成社2012
 須部宗生 静岡産業大学論集「環境と経営」第19巻第1号2013年6月
 松田裕『日英語の交流』研究社出版1991
 大塚高信・中島文雄『新英語学辞典』研究社1995

- 早川勇 『英語になった日本語』 春風社2006
- 赤川裕 『カタカナ語の話』 研究社1994
- 池谷裕二 『怖いくらい通じるカタカナ英語の
法則』 講談社2007
- デイビッド・セイン 『その英語ネイティブは
ハラハラします』 青春出版社2011
- 『コンサイス外来語辞典』 第4版 三省堂
- 加島祥造 『研究社カタカナ英語辞典』 研究社
1987
- 渡邊敏郎 『研究社和英大辞典』 第5版 研究
社2003
- 『KODオンライン・ディクショナリー』 研
究社2003～
- 西尾実 『岩波国語辞典』 第3版
[http://www.mext.go.jp/b-menu/hakus
ho/nc/](http://www.mext.go.jp/b-menu/hakus
ho/nc/)

